

## 〈 水 稲 〉

### ○水管理

- ・必要な茎数が確保されている場合、中苗のあきたこまちは第6号の1次分げつが発生したら、中干し、または深水処理を行って、その後の弱勢茎の発生を抑制します。ただし、茎数が少ないほ場では中干しの開始を遅らせ、強い中干しを行わないようにします。
- ・中干しは、7～10日間を目安に行い、田面に亀裂が1～2cm入り足跡が付く程度とし、幼穂形成期前には終了します。7月中旬以降も田面を乾かし続けて幼穂形成期（7月15日頃）に土壤水分を不足させると、1穂粒数の減少を招きます。また、中干し終了後は、すぐに湛水状態に戻さず、間断かん水を行います。
- ・用水不足が懸念される場合は、地域農家や関係機関と協力して節水管理に努め、入水時間を申し合わせるなど、計画的な用水の供給に努めます。

### ○生育・栄養診断に基づいた穂肥

- ・穂肥は、イネの伸長や玄米のタンパク質含量に影響しますので、生育・栄養診断を行って適切に穂肥を行います。
- ・あきたこまちは、各地域毎に時期別理想生育量が示されていますので、幼穂形成期（7月中旬頃）と減数分裂期（7月下旬頃）に生育・栄養診断を行い、穂肥の時期と量を決定します。

### ○葉いもちの防除

- ・補植用余り苗を処分していない場合は、直ちに泥に埋めて処分し、併せてほ場の検診を実施し、葉いもちの発生状況を確認します。
- ・持ち込み等による早期発病が確認された場合は、これまで葉いもち防除剤を使用していても防除効果が十分に発揮されていないため、直ちに予防剤と治療剤の混合剤（ブラシン剤あるいはノンプラス剤）の茎葉散布を行います。その後は、必要に応じてビーム剤を追加散布します。

### ○斑点米カメムシ類の防除対策

- ・斑点米カメムシ類の主要加害種であるアカスジカスミカメは、ノビエやホタルイ類等のカヤツリグサ科雑草の穂に産卵するため、これらの雑草をほ場内に繁茂させない管理を行うとともに、斑点米カメムシ類の産卵場所となる畦畔やほ場周辺、休耕地などの草刈りを地域でまとまって行います。
- ・草刈りは、イネが出穂する10～15日前までに、畦畔だけでなく休耕地や水田周辺雑草地等の繁殖地を対象に地域で一斉に行い、斑点米カメムシ類の密度低下を図ります。
- ・水田内にホタルイ類等のカヤツリグサ科雑草やノビエが多発している場合は、草種に合わせた中・後期除草剤を散布してアカスジカスミカメの水田内への侵入を防ぎます。

### ○気象変化に対応した栽培管理

- ・7月は、イネの幼穂が伸長する大切な時期で、低温や日照不足、大雨による水害等の気象災害を受けやすい生育時期となるため、気象情報に十分注意し、気象変化に合わせたきめ細かな管理を

行います。

- ・特に、減数分裂期（7月27日頃）に低温が予想される場合は、幼穂形成期（7月15日頃）から水温25℃程度で水深10cmにして幼穂を保護します。（前歴深水管理）

## 〈 大 豆 〉

### ○排水対策

- ・梅雨期の降雨による湿害を回避するため、ほ場周囲に深さは20～40cmの明きよ（排水溝）を施工し、明きよを排水口へ確実に接続します。既に施工している明きよは、崩れていないかどうか点検・補修を行い、排水機能を確保します。

### ○中耕・培土

- ・中耕・培土は雑草防除、湿害回避、倒伏抑制等の効果があり、大豆の生育を確保する上で重要な作業であることから、次の時期を目安に実施する必要があります。
- ・1回目の培土は、本葉2～3葉目が展開した頃、初生葉が隠れない程度に行います。2回目の培土は、本葉6～7葉目が展開した頃、本葉1葉目の節が隠れない程度に株際までしっかりと土を盛ります。培土の作業時期はあくまでも目安ですので、作業可能な時期に培土作業を確実にを行います。
- ・開花後の培土は、花落ちの原因となるため、培土作業は開花前までに終了します。

### ○除草対策

- ・雑草の発生が多い場合は、その草種に応じて除草剤を使用します。
- ・ノビエ、メヒシバ等のイネ科雑草が優占する場合は、「ナブ乳剤」、「ワンサイドP乳剤」、「ポルトフロアブル」のいずれかを散布します。
- ・アメリカセンダングサ、ノボロギク、タデ類等の広葉雑草が優占する場合は、「大豆バサグラン液剤」を使用します。ただし、適用品種は「リュウホウ」とし、これ以外の品種では、葉害が発生する場合があります。
- ・見慣れない雑草や除草剤の効果が見られない雑草などを確認した場合は、早めに農業試験場や地域振興局等の指導機関へご相談願います。

## 〈 野 菜 〉

7月は多くの野菜で収穫本番を迎えますが、雨天の日が多くなり病害虫の発生も多くなります。適切な管理を心がけ、高品質生産に努めます。

### ○ホウレンソウ

- ・ホウレンソウは生育適温が15～20℃で、夏期は高温が続くため最も栽培しにくい時期です。夏期の安定生産を図るには、遮光資材を導入し、地温、気温を下げることに生育期間中の土壌水分を確保することが重要です。
- ・前作終了後、施肥前にたっぷりとかん水を行います。作付前のかん水量は30mmを目安とし、特に地表から20cm以上浸透するよう行います（例：かん水チューブで4～5時間程度、土質により加

減し、場所によっては数回に分けて行う。筒状の容器に3cm水が貯まる時間かん水)。土の乾き具合をみて(1～3日後)、耕起・播種します。また、播種直後に発芽ムラを防ぐため、チューブで30分程度かん水を行います。

- ・高温期の生産安定を図るため、天候と生育ステージに合わせて遮光資材を上手に活用します。播種時は、地温を下げるため遮光率の高い(80%)資材で被覆します。発芽後は、徒長を避けるため遮光率の低い(30～50%程度)資材に取り替えます。高温期の曇雨天時には、被覆したままだと葉色が薄くなったり、徒長し品質が低下するので、天候に合わせて被覆資材をこまめに掛け外しすることが重要です。

## ○アスパラガス（長期どり）

- ・温度が高くなるにつれ、若茎の伸張が早く頭部の開きも早まるため、取り遅れないように収穫します。
- ・通風や若茎の着色の向上、収穫や追肥等の作業性を向上させるため、地表面から50cm以内に発生する側枝は随時除去します。それより高い位置の側枝は、大きく垂れ下がらないように誘引や先端部の刈り込みを随時行います。一度に整枝作業を行うと株の負担が増すので、晴天時に畝の片側ずつ段階的に行います。
- ・梅雨期は茎枯病、斑点病の発生が多くなります。通風を良くするとともに、発生前から予防防除につとめ、発病が見られたら治療効果のある薬剤を散布します。なお、高温条件下での防除は若茎の曲がりが生じる場合があるので、散布時の気温に注意して使用します。
- ・また、高温多湿時は、収穫後に軟化・腐敗する軟腐病（トロケ症）が多くなります。被害残さや被害茎は伝染源となるため早期に処分します。収穫する器具は清潔な物を用い、収穫作業中の刃先へ土が付着しないよう注意します。病原菌の飛散を防ぐため、バーク堆肥や敷わら等でマルチングすることも予防対策上有効です。

## ○ネギ

- ・夏ネギの培土は、ネギの葉身と葉鞘部の分岐点から10cmくらい下までの軽い土寄せとし、最終培土は収穫の20～14日前に分岐点より5cmくらい下まで行います。最終培土は大面積を一度に行わず、収穫計画に合わせて段階的に実施します。
- ・軟腐病対策として、7月中～下旬にオリゼメート粒剤を土寄せ時に使用すると効果的です。ただし、砂丘地では薬害が発生しやすいので、基準使用量の半量(3kg/10a)とします。
- ・べと病は、発病すると被害の拡大が早く防除効果が劣るので、降雨が続く前の予防防除や発病初期の防除に努めます。
- ・ネギアザミウマの発生は、7月下旬から急増期となり、発生量も年々増加傾向にあります。一般的に高温、小雨の年に多発しますので、急増期の発生状況を見ながら密度が増加しないうちに防除します。

## ○トマト（夏秋どり）

- ・本格的な収穫期を迎え、各段の肥大が進み、樹の負担が大きくなります。かん水は特に重要で、盛夏期の晴天日には、1株当たり1～1.5リットルのかん水量が必要です。
- ・日照不足で光合成による養分蓄積が不足したり、窒素過多で茎葉が茂り過ぎていたり、夜温が高く無駄に養分を消費すると、果実内部への養分転流が不足し空洞果となります。茎葉だけを旺盛

にしないよう窒素過多を避ける、施設内の夜温低下に努める、光が株全体に良く当たるようにするなど、光合成能力を高める管理を心がけます。

- ・梅雨期は病害が増えるので、施設内の換気に努めます。灰色かび病は、伝染源となる枯れた花や葉の除去を、葉かび病は初発時に適切な防除を行いまん延させないことが重要です。
- ・アザミウマ類は、これから発生が多くなる時期を迎えるので、施設周辺雑草地の除草に努めます。
- ・梅雨明け後に高温が続くと、樹勢低下や落花につながるほか、ここ数年の高温では裂果が多発しています。換気だけでは限度があるので、遮熱効果のある被覆資材（遮光率40%程度）を使用するなど、施設内気温や植物体の表面温度抑制し、強日射を遮る工夫をします。

## ○キュウリ

- ・露地キュウリの収穫期を迎えます。親つるの古い葉は段階的に摘葉し、これから出てくる若い側枝に十分光を当て、新葉の発生を促します。収穫開始後は、常に通路の土壌内部が湿っている状態を保つようかん水を行い、過乾や過湿を避けるようにします。
- ・ここ数年県北地域で黒星病の発生が多くなっています。発病を確認した場合は、①被害を受けた葉、茎、果実を取り除いては場外で処分し、②速やかに治療効果のある薬剤を散布します。③発病が見られない場合でも、予防効果のある薬剤を散布するなど予防防除につとめます。散布は、発病の多い若い葉、まきひげ、幼果等を重点的に行います。  
なお、成分使用回数が適正使用基準を超えないよう、生産履歴を確認して薬剤を選択します。
- ・露地栽培では耐病性品種の利用も増えていますが、べと病、うどんこ病、褐斑病、炭そ病が増える時期となります。初発時の防除と合わせ、排水対策、敷わら、整枝、病葉の摘葉など、病害の出にくい条件を整えます。
- ・施設キュウリは、今月下旬に定植時期を迎えます。高温期と重なるので、定植～活着までは土壌水分、空中湿度を十分に保ちます。

## ○エダマメ

- ・無マルチ栽培では、除草を兼ねて中耕培土を行います。1回目の土寄せは本葉2～3枚時に子葉が隠れる程度とし、2回目は中生種で本葉5～6枚時、中晩生種で本葉6～7枚時に初生葉が隠れる程度まで土寄せを行います。なお、作業が遅くなると根を傷めるので、開花の10日前には培土を終えるよう余裕を持って作業を行います。
- ・開花期の乾燥は収量低下の原因となります。極端な乾燥が続いた場合は、早朝や夕方の気温の低い時間帯に軽く畝間かん水を行うと効果的です。ただし、給水口近くの停滞水には気をつけます。
- ・エダマメは、開花日からの日数で収穫日のある程度予測できます。適期収穫のためには開花日を把握することが重要です。開花期間が長いので、目印となる20株を決めて、1つでも花が咲いた株が10株以上となった日を開花日とします。

※開花日から収穫始期までの目安は「湯上がり娘」で34日、「あきたさやか」で40日前後、「あきた香り五葉」で48日です。あきた香り五葉の場合、6月1日は種で7月20日、6月10日は種で7月25日頃が開花日の目安となります。予測開花日が近づいたらこまめに畑に足を運び、実際の開花日を確認します。

## ○スイカ

- ・今月中旬以降から収穫期を迎えます。交配後の日数や積算気温、打音、果梗付近の葉の枯れ具合

などを見て、最終的には試し割りを行い適期に収穫します。

- ・県オリジナル品種「あきた夏丸」は、交配後45日が収穫の目安となります。収穫遅れによる肉質の変化が少なく、収穫期の幅が広い品種なので、早どりは避け十分な糖度、熟度を確認してから収穫します。

## 〈 果 樹 〉

### 【果樹の生育状況】

りんご、日本なしは、開花期の天候に恵まれ、結実状況は良好で、果実肥大については開花期が早かったため、平年を上回っています。また、今年は少雨傾向で推移しているため、土壌の乾燥防止対策を徹底し、樹の生育や果実肥大の確保に努めましょう。

表 りんご、なしの果実肥大（平成27年6月15日）

樹 種	地 域	品 種	縦 経（平年比）	横 径（平年比）
りんご	鹿角市	ふ じ	3.52cm（127%）	3.28cm（136%）
	横手市	ふ じ	3.46cm（111%）	3.73cm（124%）
な し	潟上市	幸 水	2.85cm（120%）	3.23cm（123%）

※果樹試験場調査（鹿角市はかづの果樹センター調査値）

### ○りんご

- ・本年は、結実量が多いので果実肥大を促進させるために仕上げ摘果、見直し摘果を早急に進めます。
- ・小玉果、変形果、障害果等を除去し、果実のそろいを良くして高品質果実生産に努めます。
- ・例年、ビターピットの発生が多い園では、カルシウム剤を年間5回程度散布します。なお、高温時の散布は薬害が懸念されるので控えます。
- ・樹冠内の日当たりを良くし、結果枝に十分に日を当てるため、不要な徒長枝のせん去をします。ただし、過度のせん去は樹勢を弱めるので最小限にとどめます。

### ○日本なし

- ・小玉果、変形果、障害果等を除去し、果実のそろいを良くして高品質果実生産に努めます。
- ・長果枝候補の新梢や予備枝が7月に入っても伸長している場合は、7月上中旬に棚面に対して30～40度の角度で舟底状に誘引し、新梢伸長を停止させ花芽形成を促します。
- ・花芽形成には枝葉に光が十分当たることが重要なので、周辺が混み過ぎている場合は不要な枝を間引きます。ただし、枝の取りすぎは樹勢低下につながるので最低限にとどめます。

### ○ぶどう

- ・摘房は段階的に行い、結実不良の房などの粗摘房から始めます。その後、果房の良否、樹勢の強弱、葉数の多少等を見て摘房を行い、最終的には、キャンベル・アーリーで10 a 当たり9,000房、スチューベンで6,000房、巨峰等大粒種で3,000房を目安に房数を調整します。

- ・摘粒は遅くなると作業効率が悪くなるので、満開後25～30日頃には終えるようにします。着粒数の目安は、キャンベル・アーリーで60粒程度、大粒種で30～35粒程度です。
- ・新梢や副梢が繁茂し棚面が暗くなると、果粒肥大や品質、枝の登熟に悪影響があるほか、薬剤の透過性が悪くなり病害虫も発生しやすくなります。棚下の地面に光がチラホラと入る程度に、新梢や副梢を整理します。
- ・結実の悪い果房の付いた新梢を間引いて、光の入る空間を確保します。副梢も空間があれば1～2枚残して摘心しますが、混んでいる場合は全部取ります。
- ・房の付いた新梢1本当たりの必要葉数は、25枚程度が目安です。一定の葉数を確保しつつ、7月下旬になっても新梢の伸長が止まらない場合は、7月下旬～8月上旬に摘心します。
- ・裂果や病害の被害を防ぐため、7月20日頃を目途に袋かけ・笠かけ<sup>かさ</sup>を実施します。

## ○共通

- ・草刈りは、草高25～30cm位で行い、樹と草の水分・養分競合を避けるようにします。また、定植や移植した樹、砂土で栽培している樹は土壌の乾燥に留意し、適宜かん水を行い生育の停滞を避けます。
- ・樹勢の弱い樹には、樹幹の周りに堆肥や刈草など有機物でマルチを行い、土壌の乾燥防止に努めます。
- ・徐々に収穫期に近づいてくるので、病害虫防除は今まで以上に気をつけて実施します。特に、収穫期中の作物に農薬が飛散しないように注意します。

## 〈花き〉

例年に比べ、降水量が少なく推移しています。露地ほ場などで、かん水可能な場合は積極的に行って水分不足を補います。高温期となり、病害虫の発生も多くなる時期ですので、こまめな管理で高品質な花き生産を心がけます。

## ○キク

- ・輪ギクは、中心にあるつぼみを一個残して他を取り除く「摘蕾<sup>らい</sup>」を行います。適期は、つぼみが米粒～小豆大の大きさで、開花のおよそ25～30日前です。作業が遅れると、花首が長くなったり、傷口が大きく目立つなどの品質低下を招くため、適期作業を心がけます。
- ・早期開花が予測される場合は、摘蕾<sup>らい</sup>作業を遅らせることによって開花を若干遅らせることができます。品質低下を招かないよう、時期を見極めながら作業します。
- ・梅雨明け後、30℃を越すような高温の日が続くと花蕾<sup>らい</sup>の発達が遅れ、開花が遅延します。そのような場合には、夕方、花蕾<sup>らい</sup>を中心に霧状に散水すると、花蕾<sup>らい</sup>や葉面の温度が下がり、開花促進に効果があります。
- ・フラワーネットは、草丈の3分の2の高さまで上げます。7月に入るとキク類は1日2cm程度伸びますので、ネット上げが遅かったり張り方が弱いと曲がりの原因になります。こまめに適切な管理を心がけます。
- ・梅雨明けまでの湿度が高い時期は白さび病の発生に注意します。また、梅雨明け後の高温時には、ダニやアザミウマの発生が多くなります。病害虫の発生は、気象条件や管理方法によって毎年一様ではありません。雨が多いと白さび病、少ないとダニやアブラムシ、アザミウマ等害虫の発生

が多くなりますので、良く観察し、初期防除を徹底します。散布する薬剤の種類や散布間隔は、JAや農業振興普及課等からの情報を参考に、病虫害の発消長を確かめて対応することが大切です。

## ○トルコギキョウ

- ・ 8月開花の作型では<sup>らい</sup>発蕾が確認できますので、中心花は早めに取り除きます。また、中心花の下節から発生する側枝の最初のつぼみも<sup>らい</sup>摘蕾します。
- ・ かん水は、中心花が見えだしたら徐々に回数を減らし、草姿を硬く仕上げます。雨水がハウスに入り込むと茎や枝が間伸びし軟弱徒長となりますので、ハウス周囲に明きよを掘るなどして、品質が低下しないように注意します。八重品種などでは、極端にかん水を抑えるとブラインドなどの発生を助長する場合がありますので、品種特性等を考慮しながらかん水を行います。
- ・ 害虫の発生は比較的少ないですが、ヨトウムシ類に注意が必要です。害虫がハウス内に飛来したら防除を行います。

## ○リンドウ

- ・ 日々の管理として、フラワーネット上げが重要な作業となります。晩生品種は、今後も伸長してくるので遅れないように上げます。早生系品種では、草丈の伸びは緩慢になりますが、茎の曲がり防止のためにも、一番下のネットを草丈の半分の位置、一番上のネットを草丈の8分目までの位置、真ん中のネットは1段目と2段目の中間に張るようにします。最下段のネットの位置が低いと収穫作業の効率が悪くなるので、収穫期が近くなったら特にネットの位置に注意します。
- ・ 葉枯病や褐斑病の重点防除期間になります。特に褐斑病は、6月下旬から7月中下旬にかけて一次感染し、2～3週間の潜伏期間を経て7月下旬～8月上旬頃に初発がみられるため、前年に発生したほ場では、6月下旬からの防除を徹底します。
- ・ 開花期はアザミウマの加害が多くなります。アザミウマは花を特異的に好んで餌とし、急激に増殖するため、開花直前・開花期の防除が非常に重要です。予防散布を十分行うことと、ほ場を良く観察し、発生初期に素早く対応することが大切です。また、この時期発生が多くなるハダニなどは肉眼で見えにくいので、可能な限りルーペで観察します。
- ・ 土壌の乾湿が大きくなる時期でもあります。降雨が多いと、節間が間伸びし品質低下の原因となり、晴天が続くと、ハダニの発生や開花遅延につながります。できるだけ土壌の乾湿差を少なくするため、明きよ等により水はけを良くするとともに、乾燥時は通路かん水を行います。

## ○シンテツポウユリ

- ・ 出蕾期の頃は、葉枯病に対する抵抗力が最も弱まります。いったんつぼみに発生すると、たとえ小さな病斑でも品質に大きく影響します。病葉は見つけしだいかき取り、ほ場外に埋めるなどして速やかに処分します。
- ・ 梅雨明け間際は、降雨が多く、薬剤の散布間隔も空きやすくなります。葉枯病をまん延させないためにも、僅かな晴れ間も見逃さず、降雨後の薬剤散布を徹底することが大切です。

## ○ダリア

- ・ 生育の早い品種は、収穫期に入ります。
- ・ 切花に向けて伸ばした側枝は、真ん中の花芽を残して<sup>らい</sup>摘蕾します。また、上から3～4節の脇芽

もかき取りますが、下位節の芽は次の側枝となるため残します。ただし、株が出来上がる前の収穫は株の衰弱につながるため、無理して切花をせず、秋の収穫に向けて、十分な株づくりを行います。

- ・採光と病虫害防除の目的で下葉をかき取りますが、株が出来上がる前は逆に生育を停滞させる場合があるため、株の状態や生育の勢いで判断します。また、夏越しのため刈り込む手法もあります。品種の生育スピードを勘案し、秋の収穫期から逆算して行います。

## ○ストック

- ・今月中旬からが播種適期です。野菜の播種箱や水稻育苗箱等に、市販用土を用いて播種します。
  - a 当たりの必要種子量は60mlです。
- ・播種前に十分かん水した用土に4cm間隔に深さ0.5cm程度の播種溝をつけ、1列当たり40粒程度の条播きとします(箱当たり約500粒)。
- ・ストックは、播種してから3～4日で発芽してきます。土壤水分にバラツキがあったり、覆土の厚さが不均一だと発芽がそろわず八重鑑別が正確にできません。八重鑑別は発芽をそろえることが非常に重要です。
- ・鑑別は最低2段階に分け、1回目は発芽の悪いものや遅いものを間引きます。2回目は子葉展開時に、子葉が大きくて長いものや、色が薄くてだ円形のものを残します。間引くものと残すものを間違わないように注意します。最終的に播種量の3分の1程度を残すように間引きます。
- ・フラワーネットの引き上げが遅れると曲がりの発生につながるので、こまめに引き上げます。

## ○ケイトウ

- ・施設栽培は生育初期に土壤の乾きに応じ3～5日間隔、露地栽培であっても乾燥が続いた時にはかん水を行います。
- ・生育初期のかん水管理が、草丈確保や生育のそろいに重要です。かん水ムラのないようにします。
- ・着蕾<sup>らい</sup>始めまではハウス内の温度、湿度ともに高めに保ち、草丈をできるだけ伸ばすようにします。花芽分化期までは晴天時や高温時のみに換気し、夕方には閉めるようにします。

## 〈 畜 産 〉

### ○暑熱対策

暑熱により、飼料摂取量の低下に伴う増体量や産乳量の減少、発情回帰の遅延による繁殖成績の低下等が懸念されます。牛舎の環境を今一度点検し、暑熱によるストレスの軽減を図り、生産性の維持に努めることが大切です。

畜舎内には、直射日光が入らないようにします。南側と西日が当たる側には遮光ネットや寒冷しゃを設置して日陰をつくります。また、樹木がある場合は、風通しにも配慮した枝の整理を行います。

換気扇や扇風機による送風と換気を効果的に行うため、畜舎全体に同一方向に風が流れ、よどみが出来ないよう配慮します。窓は開けるより外した方がよく、畜舎周りの草刈りや障害物を除いて風通しを良くします。また、噴霧装置を備えた冷房システムが導入されていますが、メーカーの設置マニュアルに沿って過湿にならないよう注意します。

常に新鮮な水が飲めるようにしておきます。飲水量が十分か確認し、ウォーターカップや水槽



を常に清潔に保つようにします。

飼料給与は、早朝や夜間等の涼しい時間に行い、粗飼料は消化性の高い適期収穫されたものとなるべく与え、稲わらは細断して給与するなどして食欲低下を防ぎます。また、食べ残しの飼料は牛の唾液などにより変敗しやすく、ハエが集まったりするので、残飼は早めに取り除きます。

分べん前後の家畜や高泌乳牛は暑熱ストレスを受けやすいので、畜舎内で一番環境の良いところに移動させることも方策の一つです。

## ○飼料作物

2番草の刈り取りは遅れると夏枯れしやすいので、早めに収穫します。また、夏枯れ防止のため、刈り取りの高さを10cm以上とし、切り口もシャープに切れるように刈歯を整備しておきます。

飼料用稲は追肥による増収効果が高く、稲WC Sでは追肥によりタンパク質含量が高まりますので、生育量を見ながら7月中～下旬に窒素成分で2kg程度の追肥を行います。

(お問い合わせ先)

秋田県農林水産部園芸振興課

TEL : 018-860-1801 FAX : 018-860-3822

E-mail : engei@pref.akita.lg.jp